音　楽　科

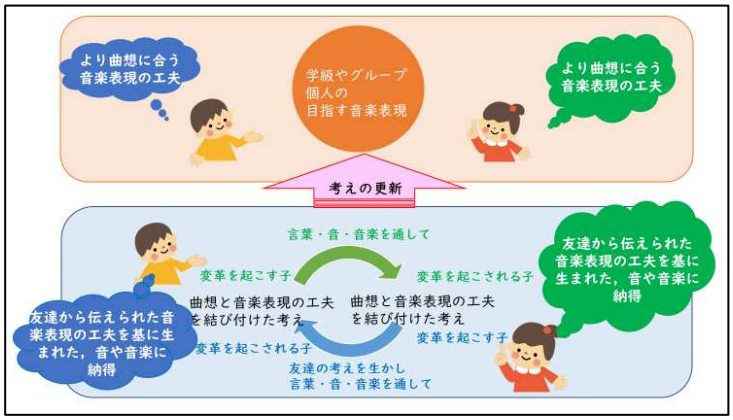
音楽科部　稲森　稚明　　依田　理紗　　藤井　有美
研究協力者　山崎　法子

Ⅰ　音楽科における「社会に変革を起こす子ども」について

【表現領域】自他の音楽表現を基に，曲想と音楽表現の工夫を結び付けた考えを伝え，他者の音楽表現を高められる子ども **この際，他者が，伝えられた音楽表現の工夫や，それを基に生まれた音や音楽に納得する必要がある。**
【鑑賞領域】自他の聴き取ったことや感じ取ったことを基に，曲想と音楽の構造とを結び付けた考えを伝え，他者の聴き方を深められる子ども **この際，他者が，伝えられた曲想と音楽の構造とを結び付けた聴き方や，それを基に聴いた音や音楽に納得する必要がある。**

本校では，子どもたちが，将来「社会に変革を起こす」ことで，ともによりよく生きていくことのできる社会を創造できるようになることを目指している。「社会に変革を起こす」とは，自分も他者も納得しながら，現在の社会の中にある課題に対する解決策を見いだして実践していくことである。ともによりよく生きていくことのできる社会を創造していくためには，音楽科を学ぶ本質的な意義である，一緒に音や音楽を聴いたり表現したりすることを通して心を豊かにすることが欠かせない。生活や社会の中にある様々な音や音楽を自分なりの価値で捉え，その音や音楽を友達と共有し，共に学ぶ中で，音や音楽を通して自分の捉えた価値や思いが相手に伝わったり，友達と音を合わせて表現できたときの嬉しさや達成感を味わったりする。そして，そのときに心が動く体験を積み重ねていくことで，他者（友達や演奏者，作曲者等）の思いを感じ取ったり，美しいものに感動したりすることのできる豊かな心が育っていき，ともによりよく生きていくことのできる社会を創造することができる。

本校音楽科の表現領域の問題解決的な学習において，子どもたちは音や音楽と出会い，聴き取ったことと感じ取ったことを基に，目指す音楽表現をするための課題をつかむ。そして，曲想を感じ取り，自分のイメージや感情などと関連付けながら表現に対する思いや意図をもつ。その思いや意図を基に，音楽表現の工夫を繰り返し試しながら目指す音楽表現をするための課題を解決し，音楽表現を高めていく。このような問題解決的な学習の中で，音や音楽から感じ取ったことや，実際に試した音楽表現を基に，曲想と音楽表現の工夫を結び付けて，言葉や音で伝えている姿が見られた。この伝えられた音楽表現の工夫を基に，試奏や試唱をし，音や音楽が曲想に合うと納得し，新たな音楽表現の工夫を取り入れながら，音楽表現を高めていくことができた。



＜図Ⅰ　音楽科表現領域における社会に変革を起こす子どものイメージ＞

また，鑑賞領域の問題解決的な学習において，子どもたちは曲を聴き，聴き取ったことや感じ取ったことを基に，曲全体を味わって聴くための課題をつかむ。そして，曲を聴きながら，曲想と音楽の構造とを結び付け，新たな聴き方（新たな曲想への解釈，または，新たな音楽を形づくっている要素との結び付き）を得ながら繰り返し曲を聴き，曲全体を深く味わって聴けるようになっていく。このような問題解決的な学習の中で，曲から感じ取った曲想と聴き取った音楽の構造とを結び付けた考えを伝えている姿が見られた。そして，友達から伝えられた曲想と音楽の構造とを結び付けた新たな聴き方に納得し，聴き方を深めながら曲全体を味わって聴くことができた。

＜図２　音楽科鑑賞領域における社会に変革を起こす子どものイメージ＞

このことから，本校音楽科では，「社会を変革する子ども」の姿を表現領域では「**自他の音楽表現を基に，曲想と音楽表現の工夫を結び付けた考えを伝え，他者の音楽表現を高められる子ども**」，鑑賞領域では「**自他の聴き取ったことや感じ取ったことを基に，曲想と音楽の構造とを結び付けた考えを伝え，他者の聴き方を深められる子ども**」と捉えた。

２　研究の方向

１年次研究では，音楽科における「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れる要因を情報活用の視点から明らかにし，その要因を基に ICT による学習指導の工夫を以下のように再考した。

情報活用の視点からの要因

・自他の音楽表現が思いや意図に合っていることを判断することができる姿【情報の吟味】

・イメージを広げたり複数の音楽を形づくっている要素を聴き取ったりすることができる姿【情報の収集】

ICT 活用による学習指導の工夫

・音楽表現の工夫を記録した動画や音声，楽譜を共有する際の視点の設定

・曲想に結び付く聴き取ったことや感じ取ったことを共有する機会の設定

実践から，表現領域では，視点を基に動画や音声を共有する機会を設定したことで，自他の音楽表現を振り返り，目指す音楽表現の達成度を判断して，曲想や，自分の思いや意図に合う音楽表現の工夫を伝えている姿が見られた。そして，伝えられた友達は目指す音楽表現を達成するためのヒントを得て，思いや意図を膨らませ，自他の音楽表現を高めていた。また，鑑賞領域では，曲想に結び付く，自他の聴き取ったことや感じ取ったことを共有する機会を設定した際に，音や音楽から聴き取った音楽を形づくっている要素や感じ取った曲想を結び付けて伝えられる子どもが増えた。一方で，音楽表現の工夫や聴き方を伝える際に，発言する児童が限定されてしまう姿や，考えていても伝えられない姿が見られた。また，自分と違う友達の音楽表現の工夫や聴き方に対する考えを受け止められなかったり，取り入れても自分の音楽表現や聴く活動に生かそうとしなかったりする姿も見られた。

これらのことから，「社会に変革を起こす子ども」の姿がさらに現れるように，課題となる姿を分析し，研究を進めていくこととした。

３　研究内容

（１）音楽科で重視する非認知的能力

１年次研究を進めていく中で見られた「社会に変革を起こす子ども」に関わる課題となる姿を分析する。分析を進めるにあたり，全体研究を受け，まず OECD の示す非認知的能力の３つの分類である「目標の達成」「他者との協働」「情動の制御」を，音楽科の教科特性に照らして具体化する。

３つの分類	音楽科の教科特性に照らした３つの分類の具体
目標の達成	忍耐力　：思いや意図を表現したり，曲全体を味わって聴いたりするために，粘り強く音や音楽と関わり続ける力 自己抑制　：目指す音楽表現をするために，自分の考えと友達の考えを調整すること 目標への情熱　：目指す音楽表現に向けて，思いや意図をもって音楽表現をする情熱。また，音楽を全体にわたって味わいながら聴く情熱
他者との協働	社交性　：目指す音楽表現を実現したり，曲全体を味わって聴いたりするために，進んで友達と関わる力 敬意　：友達の音楽表現や聴き方，それらに関する友達の考えを肯定する気持ち 思いやり　：友達の思いや意図，聴き方を共感的に受け止め，寄り添う思い
情動の制御	自尊心　：自分の考えた音楽表現の工夫や聴き方を大切にする思い 楽観性　：全ての音楽表現の工夫や聴き方が，音楽表現を高めたり聴き方を深めたりする可能性があるものだという思い 自信　：自分や友達の考えた音楽表現の工夫で目指す音楽表現ができることや，自分や友達の考えた聴き方の価値を信じること

次に，課題となる姿の要因を考え，その要因と音楽科の教科特性に照らした３つの分類の具体との関係を考える。

課題となる姿	その姿の要因
音楽表現の工夫や聴き方を伝える際に，発言する児童が限定されてしまう姿や，考えていても伝えられない姿	すべての音楽表現の工夫や聴き方が，音楽表現を高めたり聴き方を深めたりする可能性があるものと思えていないためと考えられる。
自分と違う友達の音楽表現の工夫や聴き方に対する考えを受け止められなかったり，自分の音楽活動に生かそうとしなかったりする姿	自分の聴き方に満足したり，自分の考えた表現に固執したりし，友達が考えた音楽表現の工夫や聴き方のよさを見付けようと思えないためと考えられる。

音楽表現の工夫や聴き方を伝える際に，発言する児童が限定的になってしまう姿や，考えていても伝えられない姿は，全ての音楽表現の工夫や聴き方が，音楽表現を高めたり聴き方を深めたりする可能性があるものだという思い（楽観性）の非認知的能力が低いことが要因と考えられる。また，自分と違う友達の音楽表現の工夫や聴き方に対する考えを受け止められなかったり，取り入れても自分の音楽表現や聴く活動に生かそうとしなかったりすることは，友達の音楽表現や聴き方，それらに関する友達の考えを肯定する気持ち（敬意）の非認知的能力が低いことが要因と考えられる。

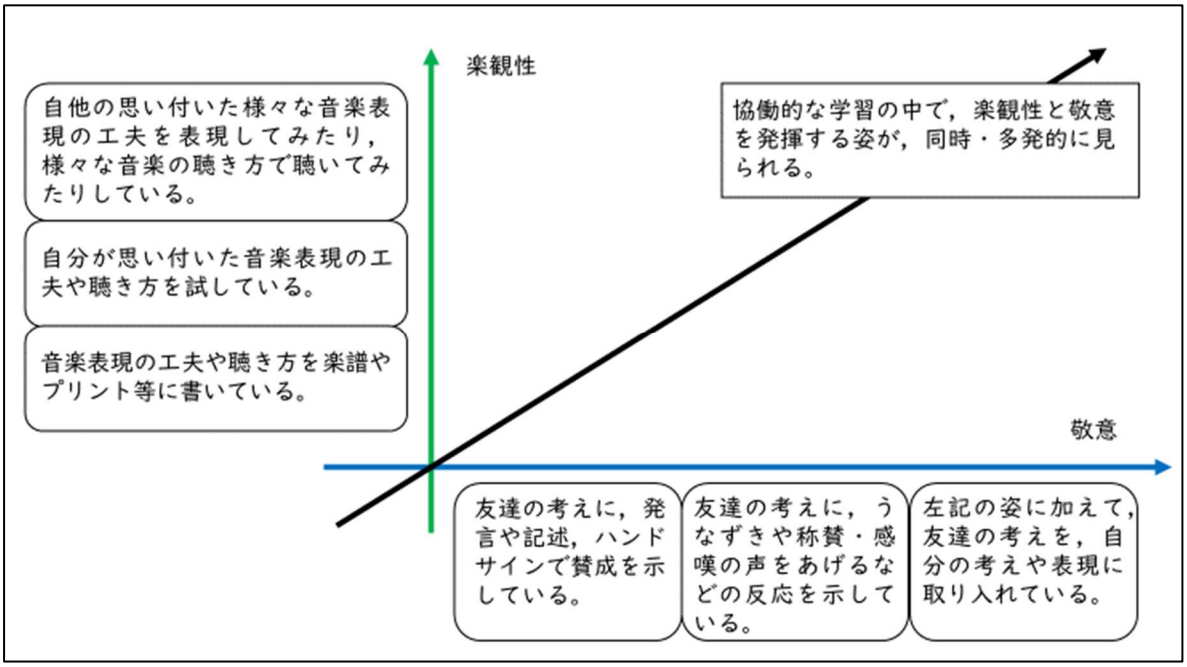
ここで，音楽科の教科特性に着目すると，音楽表現を高めたり聴き方を深めたりするために必要

なことは，音楽的な見方・考え方を働かせながら，このように表現したいという思いや意図をもつことや，自分のイメージや感情と音楽の構造を関わらせて曲全体を味わって聴くことである。音楽経験や技能の差にとらわれず，思いや意図をもって考えた全ての音楽表現の工夫や聴き方には，音や音楽を高めたり聴き方を深めたりする可能性があると考えること。そして，音楽的な見方・考え方を働かせた上で，発想を広げていく楽観性が大切である。また，友達への敬意をもち音楽表現の工夫や聴き方を受け止められるようになることで，お互いの考えのよさを認め，音楽表現を高めたり聴き方を深めたりすることにつながっていく。楽観性と敬意の非認知的能力は学習場面によって，単独で発揮される場合と，両方が同時に発揮される場合がある。これらの非認知的能力が，交互，または同時に発揮されていくことで，それぞれの能力が高まり，変革を起こす子どもの姿が表れると考える。

このことから楽観性と敬意をもって音や音楽と向き合う力が発揮できるようにすることが大切だと考える。そこで，本校音楽科では，重視する非認知的能力を楽観性と敬意とした。これらの非認知的能力が発揮された姿は以下のとおりである。

楽観性が発揮された姿 自他の思い付いた様々な音楽表現の工夫を表現してみたり，自他の様々な音楽の聴き方で聴いてみたりしている。
敬意が発揮された姿 友達の考えに，うなずきや，称賛・感嘆の声をあげるなどの反応を示している。

この姿の具体を段階的に捉えると以下のようになる。



以上のような，楽観性と敬意を発揮する姿を促すことができるように，次のような学びのデザインの工夫を行う。

（２）学びのデザインの工夫

音や音楽と，自分のイメージや感情，経験を繰り返し結び付ける題材構想

音楽科の問題解決的な学習において，楽観性と敬意の非認知的能力を高めていくためには，自分にとっての音楽の価値を，繰り返し捉えていくことが欠かせない。音楽科の学習で出会う音や音楽を自

分にとっての好みや充足度などの価値観で捉え，音や音楽との関わりを自分なりに見付けていくことで，非認知的能力が高まり，生活や社会の中の音や音楽とも豊かに関われるようになっていく。自分や友達の価値観に気付き，それぞれのよさを感じることは，音や音楽の多様な捉え方が音楽表現を高めたり，聴き方を深めたりする可能性があることに気付くことにつながる（楽観性）。また，自分なりの価値を大切にできるようになることで，友達の価値も大切にすることができ（敬意），お互いの価値観を大切にしながら，子ども同士で音や音楽の意味を広げていくことにつながる。

自分の中で音や音楽を価値付ける際に，音や音楽と自分の感情やイメージ，経験を結び付けることが大切である。なぜなら，自分の感情やイメージ，経験というフィルターを通して音や音楽と関わることで，自分の事として音楽表現の工夫や聴き方を考えることができるからである。そして，題材を通して，音や音楽に対して感情・イメージ・経験それぞれの視点からアプローチしたり，音や音楽の変化に合わせて変わる複数の感情の視点で考えたりと繰り返し関わっていくことで，音や音楽の自分にとっての価値が明確になる。音や音楽を自分の価値で捉える経験が，真正な学びとなっていく。

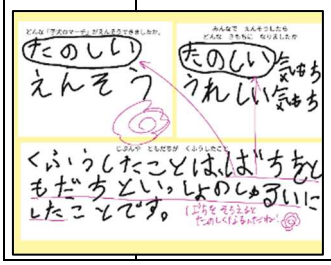
音や音楽と，自分のイメージや感情，経験を結び付けるための活動と，その効果は以下のとおりである。子どもたちが，学習の中で，自分の感情やイメージ，経験を，音楽表現・鑑賞のきっかけや根拠とすることで，「①目指す音楽表現を明確にする」，「②思いや意図をもつ，膨らませる」，「③音や音楽の背景や特徴に気付く，理解する」ことができる。そして，音や音楽との関わりがより豊かになっていく。それぞれの活動が，①～③の効果を生むために有効であるものが○，十分有効であるものが◎である。

自分のイメージや感情・経験と結び付ける活動とその内容		①	②	③
リトミック的活動	感じ取ったイメージや，浮かんできた感情を体の動きで表現する	○	○	◎
音探し	生活や社会の中の様々な音，記憶に残っている音を探す		○	○
調べ学習 （図書室・家庭）	自分の興味・関心を基に調べる 家庭での聞き取り調査から，自分や家族の経験を知る	○	○	◎
絵や写真での 視覚化	音や音楽から感じ取ったイメージをイラストや図，写真で表す	○	◎	◎
音や音楽の比較	声や楽器の音同士，形態や表現の違う音楽同士を比較する	◎	○	◎
音楽の言葉集め （収集・活用）	音楽の要素を言葉で表現したものを集める。また，集めたものを活用する	○	○	◎
振り返りシート の作成	学習した曲想と音楽の構造との関わりを基に，自分なりに題材で学んだことをまとめる。（言葉，イラスト，図など，自分の分かりやすい方法でまとめる）			◎

以上の活動を，発達段階や題材などによって，組み合わせて取り入れていく。

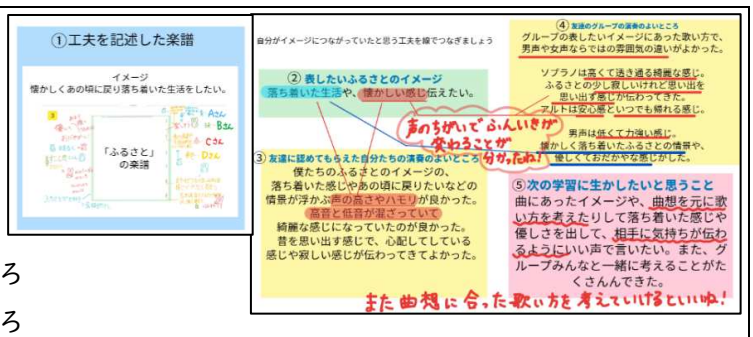
振り返りシートは，題材の最後に学習のまとめとして，また，聴き方の深まりや表現の高まりが見られたときに活動のまとめとして作成する。振り返りシートには，学習した曲想と音楽の構造との関わりを基に，題材で学んだことを自分なりの方法でまとめる。この振り返りシートは蓄積していくことで，題材や学年を越えて活用できるようにする。そのため，言葉，イラスト，図など自分の分かりやすい方法でまとめるようにする。これは，自分に合った方法で，追求したりまとめたりする個別最適な学びにも関わる。題材における活動の設定の仕方と，振り返りシートの具体例は次頁のとおりである。

＜具体例　１年　題材「みんなで音を合わせよう」教材『子犬のマーチ』＞

過程	活動	結び付けるものとその効果
であう	リトミック	自身のもつ子犬のイメージと曲想を結び付けながら，体を動かすことで，曲に対する思いや意図をもつ（②）。
追求する	音楽の視覚化 リトミック	体を動かして感じた感情や膨らんだイメージを曲想と結び付けながらイラストを描き，イメージを共有する。共有したイメージを基に，学級で目指す音楽表現を決める（①）。 友達の楽器の演奏に合わせて体を動かすことで，自身のもった子犬に対する感情やイメージを，友達の演奏と結び付ける。体を動かすことと演奏を交互に繰り返すことで，思いや意図を膨らませていく（②）。
まとめる ・生かす	振り返りシートの作成 	演奏したときの自分の感情や，子犬に対するイメージとの結び付きを自分なりの言葉でまとめていく。曲の特徴を，自分なりに理解する（③）とともに，自分の音楽に対する価値観を捉える。 〇振り返りシートの内容 ・どんな子犬のマーチが演奏できましたか。 ・みんなで演奏したら，どんな気持ちになりましたか。 ・自分や友達が工夫したこと。

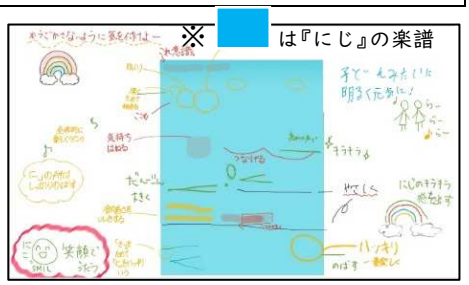
６年　教材曲：『ふるさと』

１．工夫を記述した楽譜
２．表したいふるさとのイメージ
３．友達に認めてもらえた自分たちの演奏のよいところ
４．友達のグループの演奏のよいところ
５．次の学習に生かしたいと思うところ



アイデアノートを協働的に作成する機会の設定

音楽科の問題解決的な学習において，楽観性と敬意の非認知的能力を発揮した子どもの姿が現れるためには，様々な歌唱法や奏法，聴き方のアイデアを広げたり，友達とアイデアを伝え合いながらまとめていったりすることが大切である。子どもたちが音楽表現や聴く活動を繰り返し試していく中で，音楽表現の工夫，音や音楽の聴き方を広げたりまとめたりできるように，アイデアノートを協働的に作成する機会を設定する。アイデアとは，子どもが音や音楽を聴いたときや表現をしたときに，曲想や今までの経験を基に思い浮かんだ，音楽表現の工夫や聴き方につながる発想や閃きである。



＜図３Jamboard を用いたアイデアノート＞

アイデアノートを作成する機会には，「アイデアを広げていくとき」と「アイデアをまとめていくとき」の２つの使い方がある。表現は目指す音楽表現（思いや意図＋工夫）に向けて，鑑賞は深く味わって聴くことに向けて，広げたりまとめたりしていく。それぞれの留意点は以下のとおりである。

アイデアを広げていくとき	アイデアをまとめていくとき
・思い付いたことを何でも書いてよい。 ・直感的なアイデアを大切にする。 ・お互いのアイデアを否定しない。 ・賛成のマークを記すだけでもよい。	・試しに演奏したり聴いたりする活動を行いながら判断する。 ・友達との考えの共通点や相違点を基に，類型化する。

アイデアノートを作る媒体としては，黒板や模造紙・学習プリント・ロイロノート・Jamboard を扱う。発達段階や題材の内容に合わせて，扱う場面と媒体を掛け合わせて教師が設定する。具体例は以下のとおりである。

媒体	活用方法とその効果	適した学年
黒板や模造紙	教師が子どもの意見を拾い上げながら作成していく。全体共有がしやすい	低・中・高
学習プリント	図や付箋を使って，考えの操作や類型化がしやすい。 タブレットとの併用も効果的。	低・中・高
ロイロノート	個で考える時間と共有する時間の両方を確保することができる。	中・高
Jamboard	Web 上で同時作業が可能。友達のアイデアをきっかけに考えをもつことができる。	中・高

4　授業実践　３年　「いろいろな音の響きを感じ取ろう」

（１）題材における学びのデザイン

子どもたちは，これまで友達の音や伴奏を聴きながら音を合わせて演奏したり，強弱や音程を意識して曲想と結び付けたりできるようになってきている。しかし，楽器がもつ音色について感じ取ってはいるものの,音色の工夫を考えたり,曲想と音色を結び付けて聴いたりするまでには至っていない。このような子どもたちにとって，鑑賞曲の曲想が表れる理由を金管楽器の音色を基に考えたり，互いの楽器の音色を聴きながら音を合わせて演奏したりする学習活動をすることは，曲想と音色との関係に気付き，音色を生かした演奏について思いや意図をもって，自分たちの目指す音楽表現をするという目的意識をもつことができる。そして，その目指す音楽表現の実現に向けて，楽観性や敬意を発揮しながら鑑賞や演奏をすることは，自分や友達の音色の捉え方に気付き，お互いの価値観を大切にしながら，自分なりの音色の捉え方を広げていくことにつながる。そのため，曲想と楽器の音色との関わりに気付き，曲想に合う音色で演奏することに思いや意図をもち，より豊かな合奏をすることができると考えた。つまり，一緒に音や音楽を聴いたり演奏したりすることを通して心を豊かにすることにつながると考え，題材を構想し，学びのデザインを工夫した。なお，本題材において，子どもが音楽的な見方・考え方を働かせながら，楽観性や敬意を発揮できるようにする。音楽的な見方・考え方を働かせるとは，音楽に対する感性を働かせながら，音色の観点から音や音楽と自分のイメージや感情とを結び付けたり，それらを基に，様々なアイデアを生み出し，繰り返し試したりしながら目指す音楽表現を実現することである。

目標	互いの楽器の音色やそれらが重なる音の響きを聴きながら，きれいに音を合わせて演奏する	
評価規準	（①知　・　技） （②思・判・表） （③主体的態度）	曲想と楽器の音色との関わりに気付き，拍を意識しながら互いの楽器の音を合わせて演奏している。 曲想に合う楽器の音色で演奏することに思いや意図をもったり，曲想と金管楽器の音色との関わりを聴き取ったりしている。 いろいろな楽器の音色に関心をもち，友達と音を合わせて演奏する活動に楽しく取り組もうとしている。
過程	時間	学習活動
であう	1 1 1	○『ルスランとリュドミラ序曲』や様々な金管楽器の演奏を聴き，学習のめあて「曲想と楽器の音色の関係を見付けよう」をつかむ。 ○『ルスランとリュドミラ序曲』の曲想が表れる理由を音色を基に考える。 ○『パフ』を歌ったり聴いたりする。
追求する	1 1 1 2	○『パフ』の各旋律を歌ったり，キーボードで演奏したりする。 ○『パフ』の各旋律に合う楽器を選ぶ。 ○『パフ』の各旋律を，選んだ楽器で演奏する。 ○『パフ』の曲想に合う音色の表し方を工夫しながら音を合わせて演奏する。
まとめる生かす	1	○『パフ』の合奏をする。

以上の過程で，楽観性や，敬意が生み出せるように，学びのデザイン及び学習指導の工夫を次のように具体化して行った。

【学びのデザインの工夫の具体】

「①目指す音楽表現を明確にする」,「②思いや意図をもつ，膨らませる」,「③音や音楽の背景や特徴に気付く，理解する」

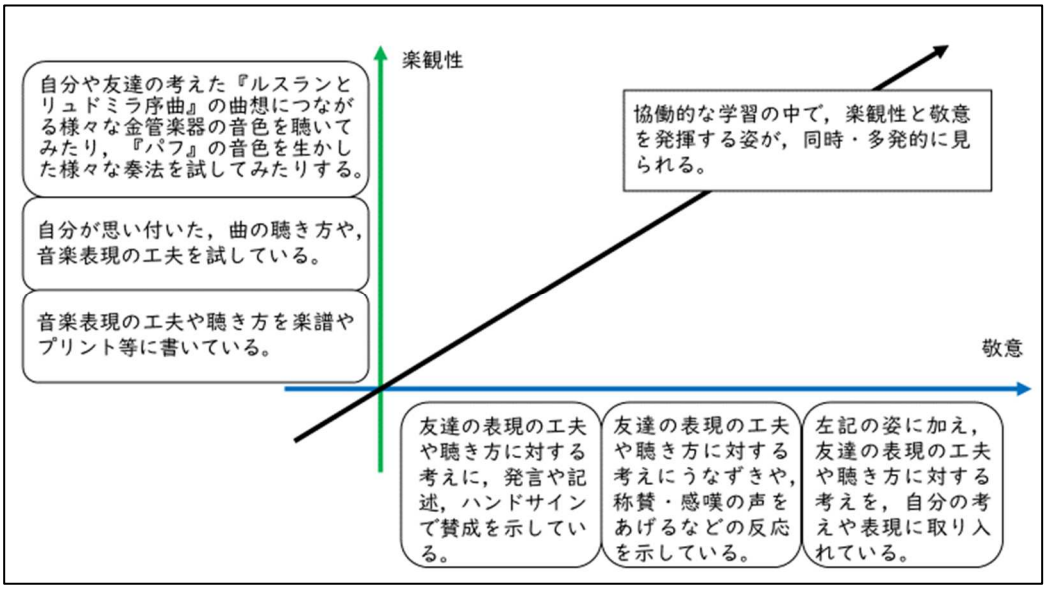
であう	音や音楽の比較	イメージや感情と結び付けながら，金管楽器の音色を聴き取る。(③)
追求する	絵での視覚化 言葉集め （活用）	『パフ』の歌詞とイメージとを結び付けながら,『パフ』の曲想を捉え，思いや意図をもったり（②)，目指す音楽表現を決めたりする（①)。 目指す音楽表現と自分のイメージとを結び付けながら，合う音色を，集めた音色に関する言葉の中から選び，思いや意図を膨らませて演奏に生かす。(②)
まとめる生かす	振り返りシート	演奏した際のイメージや感情を基に，曲想と音色についての関わりをまとめる。③

【学習指導の工夫の具体】

・「であう」の過程…学習プリント（付箋）…聴き方のアイデアノートを協働的に作成する

・「追求する」の過程…ロイロノート・黒板…演奏の工夫のアイデアノートを協働的に作成する

本題材において，段階的に捉えた重視する「非認知的能力を発揮した姿」の具体は，以下のとおりである。



（２）学びの実際　※Ｋは抽出児，Ｃはその他の子ども，Ｔは教師，　　は楽観性を，　　は敬意を発揮した子どもの姿

【本研究以前における，重視する非認知的能力の側面から捉えた抽出児Ｋの実態】

これまでの「まほうの音楽」の学習において抽出児 K(以下，K と表記)は，魔法が失敗した音だから激しい感じの音にしたいという思いや意図をもって音を工夫したり,「メヌエット」を自分のイメージと結び付けながら味わって聴いたりしてきた。その中で，自分で最初にもった思いや意図を伝えて満足してしまう姿や，自分の表現や鑑賞に熱中し友達の考えを受け止められない姿も見られた。技能面でも苦手意識をもっている。このようなＫは，本題材において，以下のように学びを進めていった。

【本題材における，子どもたちや抽出児Ｋの学び】

①　【であう】の過程（第１時～第３時）

第１時では,『ルスランとリュドミラ序曲』を聴いた。その際，Ｋは，テレビで見た経験を基にトランペットを吹く真似をする友達の様子を見て，金管楽器が使われていることに気付いた。そして，その後映像を見ながら，金管楽器にはトランペット・ホルン・トロンボーン・チューバなどの楽器があることを確認した。子どもたちは，曲を聴き,「派手，楽しい，明るい，慌てている感じ」といった曲想を捉えていった。教師が，そのような曲想が表れる理由を問いかけたところ，音の高さや強弱についてのみしか意見が出てこなかった。そこで，金管楽器での合奏とピアノの演奏での音の感じの違いを問いかけ，楽器には音色という特徴があることを伝えた。子どもたちは，楽器の音色によって曲想が変わることに気付くとともに，曲想と音色との関係に疑問をもったため「曲想と音色の関係を見付けよう」という学習のめあてをつかんだ。

＜図４　曲を聴きながら音色を記述するＫ＞

曲想と音色の関係を考えるために，教師はトランペット・ホルン・トロンボーン・チューバ，それぞれの金管楽器のみの重奏と，それぞれの楽器が主役となっている曲を参考曲として用意した。そして，８曲の中から関心のある楽器順に選んで各自で鑑賞をした。子どもたちは曲を聴き，曲から想起される自分のイメージや感情と合う音色の言葉を一覧から選び，タブレット上のワークシートに記述していった。Ｋは，トランペットの重奏を聴きながら「明るい音」「きらきらした音」等記述していった。（**図４**）

第２時では,『ルスランとリュドミラ序曲』の曲想が表れる理由を金管楽器の音色を手がかりに，聴きながら考えた。まず，第１時で各自が聴きながら感じ取った各楽器の音色を付箋に写しながら振り返った後，４～５人のグループに分かれた。その中で自分の付箋をアイデアノート（グループに１枚の学習プリント）へ発表しながら貼り付け，音色についての発想を広げていった（**図５**）。その際のＫのグループのやりとりは，以下のとおりである。

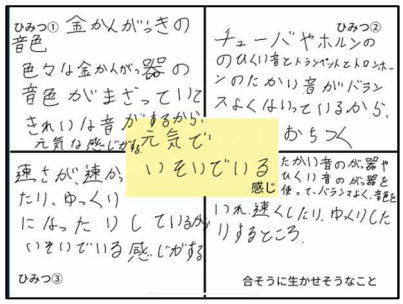
Ｋ：トランペットの音色はキラキラしている感じがしたよ。
Ｃ：迫力がある感じがしたよ。
Ｋ：賛成。（頷きながら）
Ｃ：ホルンはふわふわした感じ。
Ｋ：うーん…。（首を傾げる）
Ｃ：私は低くて悲しい感じがしたよ。ほらこの辺とか。（自分のタブレットで曲を再生する。）
Ｃ：それはむしろトロンボーンな気がした。重いっていうか…。
Ｃ：渋いみたいな感じ。
Ｋ：えっ？それは書いてなかったな。（驚いたように言い，急いで自分のプリントに書き足す。）

＜図５　付箋をアイデアノートに貼るＫ＞

第１時においてＫは，トランペットの音色を繰り返し聴きながら，自分の考えた様々な音色を記述していった。このＫの姿は，楽観性を少し発揮した姿である。また，この楽観性を発揮しながら捉えた音色を伝え合う中で，友達の考えを受け止めて驚きを示した姿は敬意を十分に発揮した姿である。Ｋは，友達の考えの発表を聞く中で，トロンボーンの新たな音色の聴き方を知り，自分のタブレットで再度曲を聴いて確かめていた。

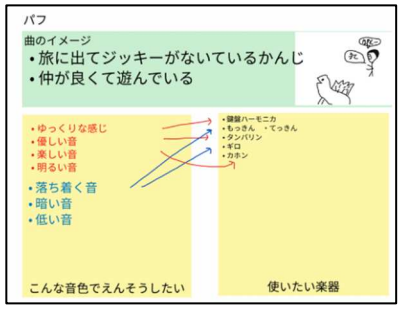
その後，教師は『ルスランとリュドミラ序曲』の曲想と金管楽器の音色との結び付きについて，学級全体へ問いかけた。子どもたちは，それぞれの金管楽器の音色と曲想とのつながりをグループごとに考えていった。

Ｋのグループは，金管楽器ごとの音色と曲想とのつながりを考える中で，曲想を醸し出しているのは，一つの楽器の音色だけでなく様々な楽器が重なり合って生み出されていることに気付いた。最後に『ルスランとリュドミラ序曲』から自分の感じ取ったイメージや感情を基に，曲に対する自身の感じ方を価値付けた。



＜図６曲想が生まれる秘密をまとめたワークシート＞

第３時では，前時の最後で価値付けた音色を基に，曲想が生まれる秘密をまとめた（**図６**）。事前に，『パフ』の合奏をすることを提示し，見付けた秘密を基に，合奏で生かしたいことについても考えた。子どもたちは，『パフ』の合奏をする際に様々な楽器の音色を入れて演奏したいという思いをもった。その思いをもって，『パフ』の曲と出会い，歌詞から曲の場面を想像しながら聴き，１番の明るい場面と２番の寂しい場面の２つを捉えた。そして，曲想と自分のイメージとを結び付け，「ジャッキーとパフが遊んでいる感じ」と「ジャッキーが旅に出て悲しい感じ」というイメージを捉えた。Ｋは自分の経験を基に，その場面に合う音色を考えた（**図７**）。



＜図７イメージを基に演奏に生かしたい音色と楽器をまとめたＫのシート＞

②　【追求する】の過程（第４時～第８時）

第４時では，前時で考えた２つのイメージに合う音色を基に楽器を決めた。子どもたちは，両方の場面で鍵盤ハーモニカの音色が必要だと考えたため，まずは，キーボードで主旋律を演奏した（まん延防止重点措置のため，鍵盤ハーモニカをキーボードで代用した）。次に，教師は副旋律の音名を伝え，子どもたちが自分の演奏したい旋律を選べるようにした。最後には，旋律を合わせて演奏した。

第５時では，キーボードの旋律に合わせて，子どもたちが考えた打楽器を試行する場を設定した。教師は，目指す音楽表現（曲想＋音楽表現の工夫）を問いかけ，子どもたちのもっているイメージ「ジャッキーとパフが楽しく遊んでいる感じ」と「ジャッキーが旅に出て悲しい感じ」と，それに合う音色の工夫を考えていくことを確認した。子どもたちは，まず，キーボード以外の音色が入ることでイメージを表現できるのではないかと考えた。キーボード以外の楽器の音色を考えた際のＫのペアでのやりとりは，以下のとおりである。

Ｃ：タンブリンが楽しい感じを出せそうだよね。
Ｋ：（タンブリンを持たずにたたく真似をしながら）こんな風に叩けばよさそうじゃない。
Ｃ：（うなずく）
Ｋ：ポップドラムはどう。（音を出してみる）
Ｃ：あ，面白そう。遊んでる感じがでそうだよね。

このようにＫは，タンブリンの奏法や，曲想に合う楽器の音色としてポップドラムを思い付いて演奏していた。このＫの姿は，楽観性を十分に発揮している姿であった。

第６時には，前時で曲想を基に選んだ楽器の分担を決め，それぞれの楽器で演奏を行った。教師は楽器ごとに集まって演奏する場を設定し，相談しながら演奏できるようにした。Ｋは主旋律をキーボードで演奏することを選んだ。Ｋは，上手に演奏することができなかったため，隣の子どもから音や指の使い方を教えてもらい，何度も繰り返し練習をしていた。

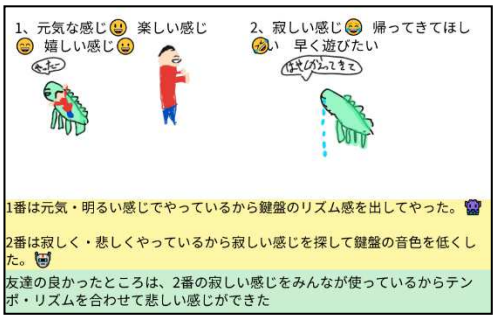
第７時と第８時では，全体で音を合わせて演奏する機会を設定した。授業の最初に，教師は子どもたちの演奏を録音したものを提示し，自分たちの目指す音楽表現の達成度を問いかけた。自分たちの目指すパフとジャッキーが楽しく遊んでいるイメージに近付いているものの，１番と２番のイメージに合わせた演奏の違いが分かりにくいため，曲想の違いをもっと出したいという思いをもった。そして，自分たちの目指す音楽表現の実現に向けて，打楽器の奏法や鍵盤楽器の音色の工夫を考えることと試しの演奏をすることを繰り返していった。各自で新たに考えた工夫をグループで共有する際の子どもたちの様子は以下のとおりである。

Ｔ：パフがいなくなって悲しいイメージを出すためには，どのような工夫をするとよいかな。
Ｃ：キーボードの音色を変えるといいと思う。７８番の音色が悲しい感じ。
Ｃ：いいじゃん！
Ｋ：（手を途中まで挙げるが，降ろしてしまう）
Ｃ：木琴は前半を明るい音色で，後半は低い音で演奏するといいと思うよ。
Ｋ：（少し間を空けて手を挙げる）２７番の音色がいいと思います。（実際に演奏する）
Ｃ：おー！なんだか泣いてる感じがする！
Ｃ：素敵だね。
Ｋ：（笑顔になる）

このようにＫは最初，見付けた音色を発表しようか悩んでいたが，周りの友達のアイデアを聴く中で，自分の考えも伝えることができていた。この姿は，楽観性をやや発揮した姿である。また，そのＫの意見を受けて周りの子どもは，感嘆の声をあげたり，褒めたりしていた。Ｋは，喜び，自分の音楽表現の工夫に自信をもっていた。この後，Ｋは自分の考えた音色のアイデアや，友達から提案された演奏の仕方を何度も試していた。この姿は，楽観性と敬意を十分に発揮した姿といえる。

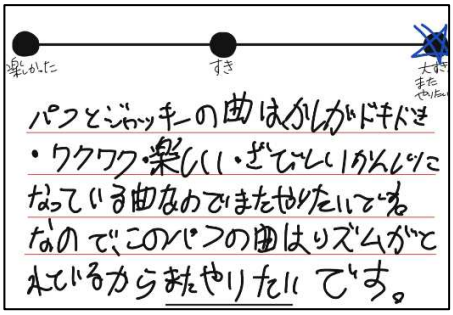
③　【まとめる・生かす】の過程（第９時）

第９時では，合奏を録画し，鑑賞をした。子どもたちが，本題材を通して学んできた鑑賞と合奏を自己のイメージや感情と関連付けて意味や価値を見いだせるように，振り返りシートを作成した（**図８**）。白の部分は合奏を聴いて想起した１番と２番のイメージ，黄色の部分は考えた工夫，水色の部分は友達と演奏してよかったこととした。Ｋは１番と２番で違った曲想の雰囲気を出すために，リズムや音色の工夫を考え演奏することができ，自分たちの合奏を録音したものを充実感に満ちた表情で鑑賞していた。



＜図８　Ｋの振り返りシート＞

これまでの学習を通して，K は楽器の演奏の技能面で苦手意識をもっていたが，『パフ』の音楽表現を考える際に，自分の楽器だけでなく友達の楽器の演奏の仕方についてもアイデアを出すなど，楽観性を働かせた姿がみられた。また，友達の聴き方や表現の工夫を聴く際に，相手が考えた背景や理由を想像しながら聴く，敬意を発揮する姿が見られた。これらの力を発揮できた K は，自他の考えた音楽表現を繰り返し試しながら演奏し，自分たちのイメージに合う音楽をつくりあげていった。これは，音楽科が目指す，自分なりの音楽の価値を捉え，友達とともに表現を高めていく姿である。



＜図９　K の自分にとっての価値を振り返ったワークシート＞

題材を通して，楽観性や敬意を発揮できた要因については，３点が考えられる。①アイデアノートを用いて，自由に発想を広げ，集約する機会を設定したことで，音や音楽から生まれたアイデアを自由に表現したりそれを受け止めたりする学級内の雰囲気を作り上げられたこと。②「であう」の過程，「追求する」の過程，「まとめる・生かす」の過程において，繰り返し，曲想と自分のイメージや感情を結び付けたことで，自分たちの目指す音楽表現を自分の価値観を通して考えられるようになったこと。③鑑賞の活動の後と，『パフ』の音楽表現を工夫して演奏した後，全体の合奏が終わった後に，音楽を自分の価値で捉えるために振り返りシートを用いて振り返りを行った。そして，自分の価値観を大切にできるようになったことで，友達の価値観も受け止められるようになったこと。以上の要因が，相互に関係し合いながら働いたことで，非認知的能力を発揮し，自分たちの目指す音楽表現へと高めていくことができた。

５．成果と課題

〇成果

・音楽表現の工夫や聴き方を考える際に，音や音楽とイメージや感情，経験とを繰り返し結び付ける学びのデザインを設定したことで，より豊かな表現や鑑賞をすることができるようになった。また，学習指導の工夫を設定したことで，音楽表現の工夫や聴き方に関する考えを出す際に，複数のアイデアや幅広いアイデアを思い付いたり，音楽で表現したりする姿が増えてきた。そして，思い付いたことを自由に伝えられる雰囲気ができていったことで，児童は様々な考えを受け入れられるようになってきた。以上により，学びのデザインや学習指導の工夫が，楽観性と敬意の非認知的能力を発揮し，音楽表現を高めたり聴き方を深めたりする上で有効であったといえる。

〇課題

・思いや意図を膨らませて音楽表現を高めたり，様々な聴き方から音楽を深く味わって聴いたりすることに，イメージや感情，経験との結び付きが有効であるものの，音や音楽と子どもたち自身の経験を結び付けることの難しさを感じた。音や音楽に適した経験を想起する方法や，家庭で調べる機会とその内容を整理していきたい。

・自分の価値として音や音楽を捉えられたが，それを生活や社会の中の音や音楽までつなげられた題材は少なかった。子どもの音や音楽の価値を，生活や社会の中の音や音楽までさらに広げていけるように，題材計画や取り扱う教材曲について模索していきたい。

【参考文献】

・小林洋子　沼田峰紀【著】『これからの時代を生きるすべての子どもたちへ　音楽教育のススメ』，幻冬舎メディアコンサルティング，2021 年